はいすくーる。

ごんべえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はいすくーる。

【Ｎコード】
Ｎ９８３４Ｍ

【作者名】
ごんべえ

【あらすじ】
とある高校の、
とある高校生による、
とある話。
唐突に始まって唐突に終わる。
そんな感じの・・・・・。

※不定期更新レス。

1限目　こんなかんじ

「暇だわ。」
そんなことを言い出したのは、いまどきどこにでもいそうな女子高校生。
「暇だなー。」
それを返すのも、やっぱりどこにでもいそうな男子高校生。
「何か面白いことないの？」
「面白いことって、どんな？」
「そんなのなんでもいいのよ。ほら、なんか言ってみなさい。」
「・・・いま献立を考える主婦の気持ちがよくわかったよ。」
「・・・？あんた男じゃない。」
「じゃあ主夫。」
「ならいいわ。」
「・・・・なんで婦と夫のちがいがわかるのさ、どっちも『フ』なのに。」
「ニュアンスの違いよ。私ほどになると、発音とかの細かいことで判断できるようになるわ。」
「そうかい・・・。じゃあその人の発音が変だったりしたときは？」
「そうねぇ・・・。やっぱり話したことがあれば大抵はわかるけど、初対面ではやっぱり戸惑うわ。というか・・・」
「まぁ・・もう慣れたよ、その無駄なハイスペック。・・・というか？」
「・・・その話の真ん中で口を挟んでくる貴方の悪癖と間の悪さはわたしもなれたわよ。」
「相変わらずの悪口だなぁ・・・この十七年間でどれだけの数、悪口を聞いたんだろうか・・・・。」
「・・・・・はぁ。」
「ん。どうかした？」

「というか・・の後に続くセリフの大部分が奪われたわ。本当に悲しいくらいあっさり言ってくれるわね。私はそのセリフを言うのに少しためらったっていうのに。・・・・このセリフ泥棒め。」
「セリフ泥棒っていわれても、盗んだものもわからないのに犯罪者扱いって理不尽だよね。」
「そうね。世の中なんて理不尽だらけよ。それこそ盗んだバイクで走りだしたいくらいにはね。」
「十六歳でそんなこと語られても・・・・・・せめてあと一年早く言ってくれればよかったのに。」
「・・・。貴方、いま素で私のボケをスルーしそうになったわね？」
「いや、ノリツッコミってやつ」
「乗り方がおかしいわ。」
「・・・・・・。」
「・・・・・・・・・。」
「すいませんでした。」
「素直で結構。」

「で？」
「なによ？」
「なんかあっちへフラフラこっちへフラフラした内容だし。まさかほんとに暇つぶしのためだけによんだ？」
「そうよ。他に理由なんていらないでしょ。」
「・・・授業中。」
「授業なんて聞かなくても問題ないわよ。」
「・・・・。怒られたし。」
「いいじゃないいまどき廊下に立たせようなんて古い先生でもなか

ったんだし。」
「その場で立たされたけどな。」
「そうね。」
「何でお前は立たされないんだよ・・・。」
「前の席の壁役さんが守ってくれたのよ。」
「・・・・おれだな。」
「確認する必要ある？」
「・・・・・・いつか絶対泣かしてやる。」
「やれるものならやってみなさい。」
「・・・・・・・。」
「ほら、やさぐれてないで帰るわよ。」
「あいよ・・・・・。」
「・・・・・・私ももっと積極的にいかなきゃだめかしら？」
「おし、準備完了ーってなんかいった？」
「いいえなにも？この唐変木」
「・・・・なんで？」

1限目　こんなかんじ（後書き）

一応きゃら紹介回でした。

なつなかんじ

ときは授業後、場所は学校。
今日もきょうとて学校はある。
あるったらある。
それがたとえ暑い夏でも。

「あついなー。」
「暑いわね。」
「なんでかな？」
「なんででしょうね。」
「夏だからかなー。」
「そうでしょうね。」
「・・・・冬だからかもよ？」
「・・・なに言ってんの今は夏じゃない。」
「あっ、ちゃんときいてたんだ。」
「聞いてたわよ。貴方じゃないんだから。」
「・・ですよねー。」
「大体こんな時期に冬なんて羨ましい単語使うんじゃないの。夏なのに冬なんてさすがに馬鹿でも気づくわよ。」
「・・・冬はすずしいもんなー。」
「長セリフのあとにそんな短い返しは悲しいわね。」
「仕方ないよ、夏だし、暑いし、やる気もおきないっつのー。その点冬はいいよねー。涼しいし、雪が降るし、池は凍るし。」
「・・・貴方ほんとに高校生よね？なんか楽しみかたが小学生レベルなんだけど。」
「いやいやいや、高校生だって表にださないだけで実は楽しみって人結構いるよ？ほら、たとえば後ろの席の岡田さんとか。」
「・・・・へえー。」

「うぉ、その眼がいちばん涼しくなるな。なんかこう、おもに背筋とか。」
「なんなら背骨でもむき出しにしてみる？もっと涼しくなるかもよ？」
「また唐突に猟奇的だな、どうしたよ。」
「・・・なんかもう・・こう。なんかどうでもよくなったわ。」
「？」
「わかんないのならそれでいいじゃない。納得しなさい。」
「そんなんじゃ余計気にな「いいわね？」・・・・はい。」
「なら結構。」
「・・・・まぁ、いいけどさ。」
「夏といったら？」
「・・・はい？」
「夏といったらなにを思い浮かべる？」
「ホント今日は唐突だな。んー夏といったら縁日とか、お盆とか、そんなもん？」
「へぇー、本当にそれだけ？」
「ニヤニヤしてんじゃねぇ。凛、わかってて聞いてるだろ。」
「いいえ、もう十七歳にもなる男の人が海やプールを言わないのは自分が泳げないから。・・・なんてこれっぽっちもしらないわよ？」
「全部言いやがった。そのとおりですー！っていうかその泳げない原因がなにを言うか。」
「あれ？私のせいなの？」
「素で覚えてないのか？」
「ええ・・・。」
「川に突き落とされたり、浮き輪を転覆させられたり、それを半端じゃない数やられたんだ。もう水につかるのもいやになるぜ。」
「お風呂とかも？」
「いやなことを聞くよな。まぁ大丈夫だけどさ。あったかいからって何とか無理やり納得させたよ。」

「そんなことで大丈夫なものなの？」
「・・・まぁ、なんとかな。」
「トラウマって案外簡単に解決できるのね。」
「まだ根底から解決したわけじゃないっての。・・・っとそろそろ部活だし行くわ、おまえはどうする？」
「そうね。今日は早めに帰るわ、今帰ればドラマの再放送、見られそうだし、見逃した回なんだものしっかり見ておかなくちゃ。」
「そか、じゃあなー」
「また、明日。」
そう言って去っていく女子高生。こと長谷部　凛。
その後姿を見届けたあと、男子高生も部室へ向かった。

男子高生こと杉田　圭介はサッカー部に所属していた。
凛は帰宅部だがいつもグラウンドちかくのベンチで終わるのを待ってくれていた。
まぁ、終わったらすぐに行ってしまうから追いかけなければいけないのだが・・・。
しかし、今日は・・・・。
―今日は、凛はいない。だから。―
「圭介のやつ、よく今日は動くなー。」
「長谷部さんがいないからね。」
「長谷部さん？」
「ほら、いつもあそこのベンチに座ってる子。」
「あぁ、あのよくこける子。」
「・・・まぁそうだけど、よくそんなこと知ってるね。」

「うっ・・・・いや偶然見たんだよ前こけるとこ。」
「前一回みただけ？それだけで『よく』？」
「い、いや・・えと・・・その・・ほ、ほら今は圭介の話だろ！？」
「ふぅん・・・。」
「な、なにニヤニヤしてんだよ。」
「いや、ご愁傷さまだなぁと思って。」
「まだ玉砕してもねぇのにそんなこと言うなよ・・。」
「だれに？」
「・・・・・参りました。」
「うんうん。で、あの子のどこにひかれたの？」
「・・・・・顔。」
「顔・・・かぁ。まぁ確かにかわいいけどさ、それじゃあご愁傷様のことばをかけるべきじゃぁなかったかもねぇ。」
「たいがいひでぇよな、お前も。」
「それほどでも。」
「いや、ほめてねぇよ。」
「長谷部さんを顔だけで判断したら痛い目みるからね。むしろあきらめ着いてよかったじゃない。」
「え、そういう意味？」
「そういうこと。」
「・・・・昔はお前も？」
「若気の至りだったよ・・・。」
「いや、お前何歳だよ。」
「まぁ、どのみち、あの二人には勝てないさ、長谷部さんはなんだかんだで圭介一本だし、圭介は馬鹿だけど。」
「ばかって・・・お前。」
「ほら、前あったでしょ、マネージャーが・・・。」
「あぁ『付き合ってください！！』『どこに』ってやつ？」
「そうそう。」
「馬鹿だな。」

「ばかでしょ。」
「じゃあまだチャンスはあるんじゃないの？」
「圭介がいつもプレー中動かないのは、長谷部さんのそばを離れたくないからだって知ってた？」
「・・・本人談？」
「本人談。」
「・・・・・じゃぁあいつは。」
「ほんとにただ自覚が無いだけだね。」
「ホントに馬鹿だ。」
「今頃かい？」

「二人ともさっきから俺の名前が聞こえて来るんだけど、いったい何の話してた？」
「いや、圭介の馬鹿さを。」
「語りあっていただけだよ。」
「・・・・なんでだよ。」
「さあね。」
「じゃあな！」
「あっおい！ったくいったいなんだってんだ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9834m/

はいすくーる。

2010年10月8日14時40分発行